様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２５４６

研究課題名（和文）家と自己：ゴシックと犯罪小説研究

研究課題名（英文）House and Self: the Gothic and Crime Fiction

研究代表者
中川　千帆（Nakagawa, Chiho）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：７０４５２０２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：「家と自己」課題は、英米文学においてゴシック研究と犯罪小説の連続性を見ながら、家というテーマに注目したものである。19世紀後半から20世紀前半の英米の作家、「推理小説」の初期作品から黄金時代の作品を中心に、家というテーマがどのように近代的自己の概念と関わっているかを明らかにするとともに、ジェンダーによって家との関わりが大きく違い、したがってゴシック小説だけではなく、推理小説においても女性の被害者・加害者と家の関係が大きく違っていることを分析した。その際には、比較的無名とされていた女性作家も取り上げることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「家と自己」課題の意義は、ジャンル小説であることによって軽視されてきた犯罪小説の分野において、ジェンダーを始めとする政治的な側面に注目しつつ、哲学、心理学、地理学、建築学などを視野に入れながら、家の表象を分析し、近代以降、アメリカまたはイギリスにおいて家とその家に住む人がどのような関係にあるのかを分析したことにある。特に当時の建築史やインテリアに関するアドバイス本などを読み込むことによって、19世紀以降、近代化されていく都市、そして郊外や田舎において変化する環境のなかで、近代的自己の在り方を家との関係から明らかにし、それを犯罪小説の中にも見出せることを指摘したことが本研究の意義である。

研究成果の概要（英文）：The research project "Self and House" explores the connections and disjunctions between gothic novels and crime fiction, focusing on the theme of house and home. Analyzing both English and American crime fiction, from the late nineteenth century to the mid-twentieth century, this research explores how the thematic of house illuminates the concept of the modern self. Another focus is how gender affects the relationship between the house and the self;that of the victim or that of the culprit, as the thematic of the house in the Gothic differs between genders. This research also is noted for discussing several female writers who were previously mostly ignored.

研究分野：英米文学

キーワード：家　自己　ジェンダー　犯罪小説　ゴシック　都市　田舎

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ゴシック文学において建物は重要なモチーフであり、古城や大邸宅は恐怖を喚起する場所として、特に幽霊などの超常現象が起こる場所として繰り返し描かれてきた。ジェンダー的視点からの研究が進んだゴシック研究では、特に女性ゴシックというサブジャンルにおいて、城や邸宅などの場所が恐怖の場所として描かれることは、女性にとって、安らぎをもたらす安全な場所であるはずの自分の家・家庭空間とはならないことを表現していると考えられてきた。女性ゴシックの古城の恐怖は、家父長制における女性の家庭空間の恐怖を表現しているのである。一方、犯罪小説、中でも 19 世紀後半以降成立した謎解きを中心とする小説においては、カントリハウスや密室といった建築的構造に注目することが多い。犯罪小説においても家庭空間は恐怖をもたらす場所として描かれているといえる。ゴシック小説と推理小説のつながりは繰り返し様々な視点から指摘されており、推理小説において、「ゴシック的」「ゴシック色の強い」などと評される小説も多くある。お互いに多くの接点を持つこの二つのジャンルについて、特に家というモチーフを中心に考えることによって、どのような接点または断絶が見られるのかを詳細に考察してみたいと考えるに至った。

２．研究の目的

家と自己という研究課題を立てた一つの理由は、近代において家が自己を反映する場所とする議論が多くされてきたためである。そのなかでももっとも代表的であり影響力のある議論の一つは、Gaston Bachelard の *La Poétique de l'Espace* (『空間の詩学』)である。そこで Bachelard は、家は個人の自己を象徴し、心理的な統合を担うものだとした。家とそこに住む人の自己、アイデンティティ、人格のつながりは、Bachelard のみではなく、心理学的・哲学的・地理学的・建築学的さまざまな視点から議論されている。またこの概念が浮かび上がるのは、20 世紀に入ってからのみではない。Walter Benjamin は 19 世紀の都市の発展のなかで、都市における家の内部が個人の内部を反映するものとなったと主張している。つまり、近代的な都市の生成の背景のなかで、近代的な自己の概念と家の概念が結びついたとしている。従って、謎解き推理小説の約束事となっている殺人現場となるカントリハウスや邸宅、または鍵がかけられた密室は、その近代的な自己の概念と家の関係を特殊な関係で示すものとなっているといえる。自己の密室性または安定を裏切る犯罪小説における家というモチーフを、ゴシック研究によって蓄積された議論を土台に分析することによって近代的な自己の描かれ方を明らかにすることができるのではと考えたのが、研究の一つの目的である。一方、女性の家はゴシック小説において恐怖の場所であったが、19 世紀以降においても安心できる場所になったとはいえないだろう。Bachelard たちのような特権的な男性たちが近代的な自己を形成し、理解する場所として家に特別の意味を与える一方で、女性にとっては家は限られた活動領域として許された場所であり、自分たちが安心を得るのではなく、男性たちに安心を与える場所として準備し、設定する役割を期待されている場所である。ジェンダーによる家の概念の差異は、犯罪小説においても表れでてくるだろうと想定した。カントリハウスミステリや密室殺人において、女性の犠牲者が比較的少ないこと自体、ジェンダーによる家と自己の関わりの関係が反映されているといえるだろう。そこから、ジェンダーに重点を置き、女性がより中心となる犯罪小説と家との関係にも注目して分析を行いたいと考えた。

３．研究の方法

上に述べたように、まず家と自己の関係を論じる議論を幅広く、特に心理学的・哲学的・地理学的・建築学的に理解することで、議論の土台を構築することを目指した。同時に、犯罪小説の理論や方法論を理解するため、特に推理小説の形式が成立した 19 世紀後半から黄金時代までの犯罪小説に関する主な研究に対する見地を幅広く得るための研究をも開始した。その上で、ゴシック小説と犯罪小説ともに家をテーマとしている作家たち、またゴシック的特色を持つ推理小説、そしてまた家を特に物語の中心においている推理小説を取り上げて、分析を行った。研究を進める中で発見した作家や作品を論じることも多かったため、最初の研究計画にあった作家や作品からは少々変化が生じている。特にカントリハウスミステリの重要性を強く認識したため、カントリハウス小説といわれる（犯罪小説ではない）いわゆる正当な文学作品をも取り上げることとなった。また、付随的に一つの大きなテーマとなったのは、都会と田舎／郊外という対立構造である。近代推理小説が都市小説として認識される一方で、家をテーマとする黄金時代の小説が主にカントリハウスや郊外の邸宅を舞台とすることから、家という概念のみをさまざまなディシプリンから拾い出すだけではなく、より広い見地から地理学的に考察する必要が浮かび上がってきた。よって、本研究に必要な基礎知識として、多くの地理学的、またジェンダー地理学的研究の理解を進めることとなった。具体的な方法としては、論文執筆の他に、特に International Crime Fiction Association の学会に参加して、フィードバックを得て議論の発展を行った。ICFA の学会は研究課題実施中の最後 2 年はコロナ禍により取りやめとなったため、最終年はアメリカ文学会関西支部の例会において発表した。

４．研究成果　（現段階では、論文として発表済みのもののみをここにまとめる）

a.「イギリス文学とイギリスのミステリにおけるカントリハウス」

　　イギリスのカントリハウスミステリは第一次世界大戦と第二次世界大戦の間を指す黄金時代のミステリにおいて、もっとも人気のあったサブジャンルである。だが、カントリハウスが主要なテーマとなったのは、ミステリにおいてだけではなく、同時期のイギリス文学作品においてもであり、「カントリハウス小説」というジャンルが存在している。本研究では、それらに目を配りながら、特に E.M. Forster の *Howards End* (1910)を論じ、 カントリハウスをテーマとした黄金時代の推理小説、Margery Allingham の *The Crime at Black Dudley* (1929), “ Safe as Houses ” (1939), Josephine Tey の *The Franchise Affair* (1948) を論じている。カントリハウスミステリをいわゆる正当な文学作品とともに並べて論じることは珍しいといえるだろうが、本研究の重要な点は、同じ背景を共有する異なるジャンルの小説において、カントリハウスがどのように象徴として、または社会的・歴史的事実として、共通項となっているかを探ったことである。文学として高い評価を受けている Forster の *Howards End* では、美しい邸宅において（真の殺人ではない）殺人事件が起こることによって、登場人物の一人が刑を受けることになる。その点からも本論文においては、*Howards End* を一種のカントリハウスミステリとして扱い、文化的・精神的なカントリハウスの持つイデオロギー的意味を探りながら、議論した。この殺人が物語の最後に起こることは、最終的に経済の不安定さを覆い隠し、家が文明を支えるものであるという印象を完成させる役割を持つと指摘した。一方で、黄金時代の推理小説における家もやはり文明・文化・国家を受け継ぎ、象徴するものとして描かれてはいるものの、殺人事件や詐欺事件によって表現されるのは、その秩序が脅かされているという認識である。カントリハウスへの脅威がイギリスの国家への脅威として描かれていることは、黄金時代の推理小説が社会的状況に無関心であるという一般的な認識が正しくないことをも示している。 “ Safe As Houses ” も *The Franchise Affair* もカントリハウスの所有に対する不安を物語の中で表現しているのである。

b. 「家とアイデンティティ：ティッシュボーン事件と黄金時代ミステリ」

　19 世紀に起きた実際の事件を着想の源として、20 世紀半ばに書かれた 2 作を取り上げ、イギリスのカントリハウスとアイデンティティの結びつきを探った研究である。John Dickson Carr の *The Crooked Hinge* (1938)と Josephine Tey の *Brat Farrar* (1948)は、いずれも 19 世紀後半のティッシュボーン事件にインスピレーションを得て描かれた物語である。1866 年、自分こそが Tichborne Park の正当な継承者であるとして南アメリカで死んだと思われていた Roger Tichborne を名乗る男がイギリスに現れた。数年、法廷において争われたこの事件は、人々の耳目を広く集め、イギリスの上流階級の正当性と安定性を問うことになったとされている。この事件を用いて書かれた Carr と Tey の作品は、それぞれの作風の違いからトーンが大きく異なるものの、アイデンティティと家・カントリハウスの関係を問うものとなっている。ゴシック色の濃い Carr の作品においては、不可能犯罪や超常現象と思われる事件が実は、現実的でありながらもある種、ファンタジー的な解決を見せる一方で、アイデンティティの根本となるものは、カントリハウスの秘密にあるとして家と自己の一致を主張している。一方、Tey の作品においては、カントリハウスはイギリスという国家を代表するものとして拡大された象徴的な力を持つ。アイデンティティ詐称者である主人公の出生の秘密によって、彼もまた実は正当な継承者であるという解決を見せるこの物語は、家の持つ象徴的力の強さを肯定し、カントリハウスとアイデンティティの強いつながりを肯定している。だが、両者の作品において特徴的なのは、アイデンティティの詐称者と本物の区別のつきにくさである。個人のアイデンティティが強固で過ちなく、唯一のものであるという概念は、両作品において大きく覆されている。このアイデンティティをめぐる両作品は、他者理解の難しさを示しているといえる。ダブルをテーマとするゴシック小説が自己の統一性に対する不安を描いたのに対し、ある種のダブルであるアイデンティティ詐称者を中心に据えたこの二作品は、近代的な自己の唯一性に対する疑問を描いていると結論づけた。

c. 「都市における人形の家：女性用居住ホテル、百貨店、殺人ミステリ」

　Walter Benjamin の「遊歩者　flâneur」の概念によって、19 世紀後半の都市を徘徊し、観察する男性たちは、文学的・芸術的なある種の近代的ヒーローとして見られるようになった。従って、19 世紀に登場した近代推理小説の Dupin や Holmes たちの探偵たちは、大都会となった都市を歩き、疎外された人々たちの犯罪を解決するヒーローであるといえる。だが、女性と都市の関係は非常に危ういものである。彼女たちは観察する立場ではなく、観察される立場であり、ヒーローとはならず、犠牲者となる。本研究では、都市における女性の家という概念に注目し、ニューヨークシティの女性居住用ホテルを舞台とした殺人事件を描いた、比較的知名度の低い作家 Hilda

Lawrence の *Death of a Doll* (1947)を論じている。女性の同性愛者を犯罪者・異常者として描くこの作品は、明らかにホモフォビックな側面を有し、推理小説に多い保守的な価値観を反映している。同時に、女性の都市における生き方と居場所を細かく考察してもおり、単なる保守的な価値観の表れに留まっていない。19 世紀後半より現れた都市の女性専用居住ホテルは、都市が拡大し、女性の安価な労働力が必要となるなかで出現した。有名なものとしては、Mary Kenney の Jane Club、また 1980 年代まで女性専用ポリシーを継続したマンハッタンの The Barbizon Hotel for Women などがある。Lawrence のこの小説では、女性専用ホテルと百貨店という都市における女性のために設けられた、または女性に優しい場所とされた場所が舞台となっている。だが、特徴的なのは、都市の建物の外、つまり路上が女性にとって危険なところとされているのではなく、都市の中の家庭的で安全な場所として宣伝されている場所が危険な場所となっていることである。小説のタイトルからもわかるように、この小説が訴えていることは女性を「人形化」することの問題である。居住者の未婚女性たちに対して「母親のような」監督者を置くことによって、女性専用ホテルが安全を提供することができるはずであるという、女性を幼児化した見方に対して疑問が呈されている。都会における女性の家を描いた *Death of a Doll* は、女性を子供か母親かという二分化する考えのグロテスクさを明らかにし、また女性専用ホテルが階級差を維持する役割を担っていることを示していると結論づけた。

d. 「屋根裏の少女探偵：ナンシー・ドリューシリーズとジュディ・ボルトンシリーズ」

もっとも有名な少女探偵シリーズ、Nancy Drew は、1930 年に誕生した。また彼女に次ぐ人気を博した Judy Bolton シリーズも遅れることたった 2 年で出版が始まっている。この二つのシリーズに対する評価は、極めて限られたものである。Nancy Drew シリーズも Judy Bolton シリーズもほとんどの議論は児童文学の枠組みからのものに限られてきた。しかし、この二つのシリーズを取り上げるのは、彼女たちの誕生がまさに推理小説の黄金時代に当たり、多くの他の作品たちと同じ文脈から論じることが可能であると考えたためである。同時に、Nancy Drew が女性探偵として圧倒的な知名度を持つことも無視できない。フォーミュラに従って書かれている数多くの作品は、ある種、機械的なプロット展開を見せ、文学的価値が高くないという評価に反論することはできない。しかし、興味深いのは、これらのシリーズに屋根裏、または地下室を探検するシーンが頻出することである。それらのシーンが描かれることで、少女探偵シリーズには論理的な推理を必要とする謎だけでなく、超自然現象をほのめかすゴシック的な要素が持ち込まれている。本研究では、特に屋根裏が持つ意味を、Bachelard と Carl Jung の議論や、フェミニスト文学批評、そして、歴史地理学的側面から考察すると同時に、Nancy Drew と Judy Bolton シリーズにおいてどんな意味を持つ場所として描かれるかを分析した。よりリアリスティックな Judy Bolton シリーズでは、屋根裏は彼女の生活空間の延長であり、自分の悩みを表現する場所となっているのに対し、Nancy Drew シリーズでは屋根裏部屋は彼女のジェンダーと年齢に制限されない可動性を持ちつつも、少女であり、家庭的であることを思い出させる場所となっていると結論づけた。

結論

自己と家の関係を問う本研究は、犯罪小説という比較的軽視されてきたジャンルにおいて近代的自己の在り方を検証するものであった。だが、哲学者たちによって議論されてきた個の自己と家の一致という概念は、黄金時代の推理小説において当初、予測したよりは顕著ではなかった。理知的なゲームとして考えられてきた黄金時代の謎解き推理小説において、自己という概念を抽象化したパズルとして家が謎解きの場所となると想定されたが、それが当てはまる例は数少なかった。一方、特徴的だったのは、国家と市民の関係を浮き彫りにするものとなっているカントリハウスミステリにみられる、カントリハウスの象徴的機能である。カントリハウスは、イギリスという国家を代表するものとして描かれ、多くの黄金時代の作家たちはその存続に対する不安や危機感を犯罪が起こる場所という形で表現している。一方、アメリカにおける作品においては、邸宅と国家の呼応関係を描くものはほとんど見られなかった。邸宅とそこに住む個人の一個の個人としての個性・人格の呼応関係を描くことの方が多く、住人と家との関係は密接なものとなっている。それは 19 世紀後半にかけて、彼らがより近代的個の在り方を求める一方で、人格を表現するものとして家を見るようになったことを反映しているだろうといえるだろう。一方、女性を主な登場人物とする作品においては、家は決して自己の居場所として安心できる場所ではなく、絶えず不安や居心地の悪さを感じさせる場所となっている。女性が中心となり、家が中心的なテーマとなる推理小説では、自然とゴシック的モチーフを使い、超自然的な雰囲気をうかがわせるものが多かった。推理小説においても、ゴシック小説と同様、家父長制における脅威を思わせる空間として家は登場している。その中でも大きな例外となっているのは、少女探偵 Nancy Drew シリーズである。ジェンダーと年齢の制限を受けない、彼女の、家との、そして外の社会との関係は、推理小説においても例外であり、願望を充足するファンタジーであるといえる。しかし、一般にリアリスティックではないという批判を受け、現実逃避傾向を指摘される黄金時代の推理小説においても、家と自己の関係は社会的構造とイデオロギーを反映しているこ

と、そして、ジェンダーによる女性の居場所と自己概念の問題を色濃く反映していることが分析によって示された。その点に関しては、次の研究課題「犯罪小説における女性の居場所と職業」へと継続して研究していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Chiho Nakagawa	４．巻 9
２．論文標題 The Girl Detective in the Attic: Domestic Space in the Nancy Drew Series and the Judy Bolton Series	５．発行年 2021年
３．雑誌名 欧米言語文化研究	６．最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Chiho Nakagawa	４．巻 8
２．論文標題 A Doll's House in the City: Women's Hotels, Department Stores, and Murder Mystery	５．発行年 2020年
３．雑誌名 欧米言語文化研究	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Chiho Nakagawa	４．巻 7号
２．論文標題 Home and Identity: The Tichborne Case in the Golden Age Mystery	５．発行年 2019年
３．雑誌名 欧米言語文化研究	６．最初と最後の頁 55-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Chiho Nakagawa	４．巻 6
２．論文標題 Safe as Houses: The Country House in English Literature and Mysteries	５．発行年 2018年
３．雑誌名 欧米言語文化研究	６．最初と最後の頁 １－２０
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 中川千帆
２．発表標題 家を読み解く―Anna Katharine Greenの"domestic detective fiction"―
３．学会等名 関西アメリカ文学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Chiho Nakagawa
２．発表標題 Home and Identity: The Tichborne Case in the Golden Age Mystery
３．学会等名 International Crime Fiction Association（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Chiho Nakagawa
２．発表標題 Edgar Allan Poe's Gothic Space and the Crime Scene
３．学会等名 Gothic Spaces（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Chiho Nakagawa
２．発表標題 Finding Self in the House: Gothic House and Locked Room
３．学会等名 International Crime Fiction Association（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関